

## 4 唐代から五代・十国時代における変遷

### i 初・盛唐

#### a 供膳具・水器（付図9）

**飲器** 高足杯は新器形が登場する。8世紀中頃に埋納された西安・何家村（長安城興化坊）埋蔵坑出土鍍金銀・銀器、同じ頃の西安・沙坡村（長安城春明門付近）出土鍍金銀・銀器が代表例である。北魏5世紀後半に出現したⅡ類の系譜をひき、杯は細身だが丸底で、脚も高くなるもの（以下、VI類）と、口縁が外反して伸びる皿状の身に、高足がつくもの（以下、VII類）とがある。

新器形のVI類は、何家村例（9-T1）や沙坡村例（9-Ua1）で、脚に太目の突帯、杯の口縁下に細い突帯をもつVI類の典型例である。（以下、VI類C）。741年の河南・慶山寺塔地宮出土鍍金銀器（9-Sa1）もほぼ同巧。何家村・沙坡村例は、狩獵文を飾り、7世紀後半とする見解がある（文献16・488）。日本の奈良・興福寺出土例からみて、VI類Cはすでに720年頃に存在したことは確かであり、7世紀後半に遡る可能性は十分にある。金属器以外だと、初唐頃の広東・英德出土釉陶（9-Aa1）や、早期の湖南・長沙出土陶器（9-Db1）が古い例である。前者は脚や杯部に突帯がなく（以下、VI類A）、後者は脚に太い突帯があるが、口縁下に突帯がない（以下、VI類B）。VI類Bは、則天武後期、すなわち7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土三彩（9-Lb1）まで残る。VI類は8世紀後半以後の確かな例がない。630年の陝西・李寿壁画墓（第11図1）の女人が手にするのはVI類であろうが、A～C種のいずれかは確定できない。他に米国・フリラー美術館蔵銀器（9-Wd1）は、VI類Cに似るが、口縁端を花弁状につくる（以下、VI類D）。中国での確実な出土例はないが、中・晚唐に盛行する高足杯VIII・IX類の祖型になる可能性があるので敢えて取り上げた。VI類Dの年代は、脚の中程に太い突帯があり、狩獵文も飾ることから、8世紀中頃までに納まると考えている（文献488）。

新器形のVII類の一つは、初唐とみる安徽・郎溪出土銀器（9-Nc1）で、杯の腰に稜がある（以下、VII類B）。後述の何家村出土の把手付杯VII類Bに似ており、初唐でも新しく7世紀末頃になるのではと推測する。8世紀中頃の西安・沙坡村出土鍍金銀器は、杯を輪花状につくる。脚・杯ともに突帯がない浅目のVII類C（9-Ua3・Ua4）と、脚に太い突帯をもつ深目のVII類D（9-Ua5）である。ほぼ同時期の西安・韓森寨出土鍍金銀器（9-Va2）は、杯の腰に稜があるVII類E。日本の奈良・興福寺出土品から見て、VII類Eは720年頃に存在したことが確かである。金属器以外では、初唐の河北・邢窯出土瓷器（9-Dc2）がある。VII類Cに似るが、杯身は輪花ではなく、円形（以下、VII類A）。同類は、中唐とみる河北・邢窯出土瓷器（11-Ee1）にあるが、これを除くと、8世紀後半以降の確実な例はない。VI・VII類はササン朝ペルシャなどからの影響と見ている（文献95・488・501）。

高足杯は他に、杯部が内湾気味のIV類Bの系譜をひくものが667年の陝西・段伯陽出土瓷器（文献298）、杯部が口縁でわずかに外反する浅目のV類Cが、初唐の河北・邢窯出土瓷器（文献367）にあるが、ともに以後にはつづかない。前者は、蓮弁や円・方文を半浮彫にしており、

ガラス器の模倣と推測する（以下、IV類C）。

把手付杯も新器形になる。697年の西安・姚无陂墓出土銀器（9-L a2）は、体部が反り、下腰に稜がつく細身のもの（以下、VI類A）。8世紀中頃に埋納された西安・何家村出土金器（9-T2）や沙坡村出土銀器（文献302）もほぼ同巧。他の沙坡村出土銀器（9-U a2）は浅目で口縁が開くもの（以下、VI類B）。VI類は、中唐とみる河北・邢窯出土瓷器（11-E e2）にVI類Aがあるのを除くと、8世紀後半以降の確実な例がない。8世紀中頃の何家村出土金器（9-T3）は八稜形であるのが特徴（以下、VII類A）。各面に中国官人風の人物像などを半立体的にあらわす。7世紀の伝世品とする見解もある（文献16・501）。後述する高台付杯VII類の存在から、8世紀初に存在したことはほぼ確かといえる。唐草文を線表現する西安・韓森寨出土鍍金銀器（9-V a1）は8世紀中頃。何家村出土銀器（9-T4）は、やや浅目で八花形につくる（以下、VII類B）。以後の、VII類の確実な例はない。VII類はササン朝ペルシャなどからの影響とみている（文献95・501）。

金属器以外の新器形は、684年の湖北・李徽墓出土三彩（9-J a2）や、7世紀末～8世紀中頃とみる西安出土交胎陶器（文献2）。前者は杯が筒状だが、口縁で反るもの（以下、IV類）、後者は腰が丸味をもち、口縁で反る杯に把手をつけたもの（以下、V類）。741年の河南・慶山寺塔地宮の壁画（第12図4）には、僧がV類らしきものを手に持っている。IV・V類とともに以後にはつづかない。

把手付壺形杯は、遼寧・李家営子出土銀器である（9-H a1）。壺形だが、口縁が外反するものである（以下、III類）。年代は、決め手に欠けるが、618～683年に比定する人もいる（文献16）。類品は8世紀中頃以前とみる西安・興化坊出土銀器（文献499）にもある。西域のソグド人壁画（文献421）も同類で、把手をつかんで飲もうとする様子がうかがえる。中唐ではすたれる。

楕円長杯は、上述の遼寧・李家営子から出土した銀器（文献95）がある。以後の例はない。曲長杯は、格好の出土例はないが、中唐では盛行しており、初・盛唐にも用いられた可能性はある。日本・白鶴美術館蔵鍍金銀器（9-H b2）は、唐7世紀後半に比定している。典型的な八曲長杯（以下、II類A）であり、日本の正倉院例とも類似する。角杯は684年の湖北・李徽墓出土三彩（9-J a1）がある。630年の陝西・李寿墓壁画（第11図2）では右手に角杯、左手に提梁罐をもつ。8世紀中頃に埋納された西安・何家村出土例は瑪瑙製角杯である（文献310）。ただし、以後の例はない。耳杯は、8世紀中頃に埋納された西安・何家村出土銀器（文献16）がある。口縁が反るものである（以下、IV類）。耳杯は極めて稀で、以後の出土は知らない。

**杯・碗・鉢** 杯は、金属製品が少ないが、708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（9-N b2）はその一つ。高台付杯IV類のうちでも、高さが口径を超える究極の一品である（以下、IV類D）。同墓では浅い高台付杯III類の鉛製明器（9-N b3）も出土している。高台付杯III類は、初唐の湖南・長沙出土瓷器（9-D b4）、7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土三彩（文献435）、やや高目の高台付杯IV類Bは初唐初頃の廣東・英德出土釉陶（文献64）、高さが口径に近くなったIV類Cは則天武后期7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土例（9-L b3）まで残る。7世紀中頃の湖南・長沙出土瓷器（9-D b3）、652・654年の四川・冉仁才墓例（9-E a1）や上述

の鞏義出土の他の例（文献235）は、IV類Dに似て、口縁が外反するもの（以下、IV類E）。741年の河南・慶山寺塔地宮出土瓷器（9-S a2）は、口縁が外反するが、丈が低い（以下、IV類F）。既述したように、7世紀後半～8世紀前半の壁画（第11図8、文献56・385）をみると、盤上に杯III類やIV類らしきものをのせて運んでおり、飲器と推測できる。体部がやや内弯気味に開く高台付杯V類は、638年の湖北・楊氏墓出土瓷器（9-C a5）にあるが、浅目である（以下、V類B）。666年の寧夏・史鉄棒墓出土陶器（9-F b2）や724年の西安・于隱一族墓出土陶器（文献424）のように、さらに浅いもの（以下、V類C）もある。後者は燈盞としている。741年の廣東・張九齡墓出土釉陶（9-R c6上）は高台付碗VI類Cの小型品（以下、高台付杯VI類C）。708年の陝西・韋洵墓出土銀器（文献259）は、既述した把手付杯VI類Aの把手のないもの（以下、VII類）。763年の湖南・鄭府君墓では、体部が直線的に開く浅目の高台付の瓷器（9-W b2）も出土している（以下、VII類）。この系統は中唐につづく。718年の河南・李珣墓出土滑石器（9-P b1）や733年の西安・韋美美墓出土三彩（9-Q b2）は、後述する稜碗III類と同形だが、小型なので杯とした（以下、稜杯III類）。

他に、新器形としては、668年の西安・李爽墓出土ガラス花形杯（文献291）、669・670年の寧夏・訶耽夫婦墓ガラス花形杯（9-G a1）がある。浅目の六花形で平底（以下、花形杯I類）。684年の湖北・李徽墓出土三彩（9-J a3）は方形の花形杯（以下、花形杯II類）。西安西郊出土鍍金銀器（9-F c3）は高台付の八花形。韓偉編年第一期（618年～683年）。碗と呼んでいるが、小形であり、杯に含める（以下、花形杯III類）。

平底杯はIII類が684年の湖北・李徽墓出土陶器（9-J a4）、丸底杯はIV類が697年西安・姚无陂墓出土銅器（9-L a5）や741年の河南・慶山寺塔地宮出土鍍金銀器（9-S a5）に残る。丸・平底杯の新器形は、体部が丸みをもって立上ったのち外反するもの（以下、VII類A）。丸底では8世紀中頃の西安・何家村銀器（文献16）、平底では7世紀～8世紀中頃の西安出土銅器（9-M b6）や江蘇・鎮江出土銅器（9-W e3）がある。陶・瓷器だと、体部の外傾が強い（以下、VII類B）。丸底は731年の河南・鄭夫人墓例（9-Q a3）、平底は741年の廣東・張九齡墓例（9-R c3）。

碗のうち、丸底碗はやや深目のIV類が前期の湖南・長沙出土銅器（文献296）、浅目のV類Bが625年の浙江・衢州出土銅器（9-B b5）に残る。長沙例は器表に多数の沈線、衢州例は口縁近くに2本の沈線をめぐらせる。長沙例は、口径16.7～18.5cm、高さ7.5～8.5cmの3点があり、入子になっていた可能性があり、銅匙も伴出。新器形は、8世紀中頃の西安・何家村出土銀器（文献16）で、口縁が丸味をもって立ち上がったのちわずかに外反（以下、VII類）。体部に三葉文を飾る特殊品。韓偉（文献16）は、第一期（618～683年）に比定（以下、韓偉編年と略す）。

平底碗は、口縁がわずかに外反する浅目のものが登場する。741年の河南・慶山寺塔地宮出土瓷器（9-S a6）などである。瓷器のV類が、620年の洛陽・裴氏墓から出土している（9-B a4）。

高台付碗は、体部が丸味をもってほぼ直に立ち上がるIV類が初唐に残るが、以後はすたれる。いずれも瓷器で、638年の湖北・楊氏墓例（9-C a7）がほぼ最終資料。新器形は8世紀中頃の西安・何家村出土銀器（9-T 8）で、浅い平底碗に高台をつけたもの（以下、I類D）。口縁内唇が肥厚するのも特徴。韓偉編年では第一期（618～683年）。体部が外傾して口縁で外反

するVI類は、初唐の湖南・長沙出土瓷器（9-D b8）や661年の広東・許夫人墓出土瓷器（9-E c6）で、浅目だが、外傾が強くなる。（以下、VI類B）696年の西安・温思暕墓出土瓷器（9-K b5）は、さらに浅目になる（以下、VI類B）。741年の広東・張九齡墓出土釉陶（9-R c6中）もほぼ同巧。

高台付碗の新しい金属器の一群は、8世紀中頃に埋納された西安・何家村出土品。VI類に近いが体部が立ち気味で、口縁の反りも強い（以下、VII類）。A～Cの3種がある。VII類Aは金器（9-T9）と鍍金銀器（9-T11）で、体部が外傾気味で、反りも弱い。後者には新式である外被せの輪状撮みの笠形蓋が伴う。VI類Bは鍍金銀器（9-T10）で、体部が立ち、口縁の外反も強い。小型であり、杯とすべきか。VI類Cは鍍金銀器（9-T12）で、VI類Bより深く、輪状撮みの笠形蓋が伴う。これらのうち、VI類Aの金器（9-T9）とVI類Bの鍍金銀器（9-T10）は、体部に蓮弁などを表し、韓偉編年では第一期（618～683年）。ただし、瓷器でみると、741年の河南・慶山寺塔地宮出土瓷器（9-S a7）はVII類A、750年の河南・鄭秀墓出土瓷器（9-V4・V5）はVII類Bで、何家村例はいずれも8世紀中頃とみていいであろう。VII類の典型例は以後にない。瓷器では、口縁端まで直線的に開くもの（以下、VIII類）がある。750年の河南・鄭秀墓例（文献9）、756年の河南・竇承家墓例（9-W b4）などのように8世紀中頃に多い。

高台付碗の他の新器形は、体部の腰に稜がある稜碗と花形の花碗。後者は少量の金属器が南北朝晚期頃には登場しているが、一時的で、出土例が多くなるのは7世紀後半～8世紀初あたりからである。稜碗の金属器は、732年の西安出土鍍金銅器（文献24）と8世紀中頃の西安・沙坡村出土銀器（9-U a7）。732年の西安例は、円形で口縁の反りが強い（以下、稜碗Ⅲ類）。類例は741年の広東・張九齡墓出土滑石器（9-R c5）。沙坡村例は口縁が強く反り、しかも花形でもある（以下、稜碗Ⅳ類）。円形の稜碗で古いのは7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土瓷器で2種がある。1例（9-M a7）は口縁の反りがやや弱いもの（以下、稜碗Ⅱ類）、他の1例（9-M a8）はⅡ類の丈を高くしたもの（以下、稜碗Ⅰ類）。706年の陝西・永泰公主墓出土三彩（文献300）はⅡ類のようである。718年の西安出土瓷器（文献31）や738年の河南・王仁波墓出土瓷器（9-R b4）はⅢ類に似るが浅目のもの（以下、稜碗Ⅴ類）。以後は、中唐と見る河北・邢窯出土瓷器（11-E e6）に稜碗Ⅲ類がある程度。

花碗は、南北朝晚期～隋のI類Aの系譜をひくものが、8世紀中頃の西安・沙坡村出土銀器（9-U a6）にある。花弁が口縁に及んでいない点や脚がほぼ直である点が異なる（以下、花碗Ⅱ類）。年代は韓偉編年第一期（618～683年）である。伝洛陽出土銀器（文献263）はI類からⅡ類への過渡的要素をもち、7世紀に比定している。他に、丈が高い高台付花碗（以下、花碗Ⅲ類）が盛唐の河南・伊川出土三彩（文献126）にある。外面全体を粟粒文で飾るのも特徴。

鉢は、古式の平底鉢Ⅲ類の系統が666年の寧夏・史鉄棒墓出土陶器（9-F b7）、隋代に登場した高台付Ⅳ類が初唐の河北・邢窯出土瓷器（文献367）に残る。主流は高台を省略した銅器（以下、平底鉢Ⅴ類B）。709年の河南・李延禎墓例（文献116）や同年の河南・李嗣本墓例（9-P a5）、733年の西安・韋美美墓例（9-Q b5）、738年の李景由墓例（9-R a7）などである。古いのは早期の安徽・繁昌出土瓷器（文献205）で、やや浅目である（以下、V類A）。中唐にもつづく。

鉢の新器形は、体部が外傾したのち外反する深目の高台付。664年の陝西・鄭仁泰墓出土瓷器（9-Fa4）は花弁らしきものを表現（以下、VI類A）、675年の恭陵哀皇后墓出土瓷器（9-Ia4）は体部に段をつけるもの（以下、VI類B）。741年の広東・張九齡墓出土釉陶（9-Rc6下）は、高台付碗VI類Cを大きくしたもの（以下、VI類C）。641年の江西・興安出土銅器（9-Cc9）、709年の河南・李禎延出土銅器（9-Ob3）や同年の河南・李嗣本墓出土銅器（9-Pa4）は、丸底風の浅いもの。浅洗IV類に似るがやや小型で、口縁が直であることから浅い鉢とした（以下、VII類）。

飲器らしい特殊な小型の丸底鉢IV類Bは、初唐頃の広東・英德出土釉陶器（9-Aa2）に残るが、以後は途絶える。

**鉄鉢形・孟** 鉄鉢形は、金属器の好例がないが、黒釉陶器が参考となる。7世紀末～8世紀初の西安出土例（文献2）や741年の河南・慶山寺塔地宮出土例（9-Sa9）は底がやや尖り気味（以下、III類）。765年の洛陽・神会墓出土例（9-Wc6）は尖底なのが特徴（以下、IV類）。

孟は6世紀以来のIV類Aが盛行する。高台の付くものはないようである。673年の遼寧・左才夫婦墓出土銅器（9-Gc5）が典型だが、瓷器では655年の寧夏自治区・史道洛墓例（9-Eb8）や689年の山西・崔撃墓例（9-Jb6）などのように深目で蓋を伴うもの、678年の寧夏・史道洛墓出土例（9-Ib5）のように平底のものなどバラエティに富む。河南・鄭州出土三彩（9-Vd6）はIV類Aの系譜をひくが、底が尖り気味となる（以下、IV類B）。盛唐とするが、鉄鉢形との比較から、8世紀中頃になろう。隋代に登場する特に深目のV類Aは、初唐の湖南・長沙出土瓷器（9-Db10）。708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（9-Nb6）は内弯が強いもの（以下、V類B）。V類は以後途絶える。

**魁** 魁は738年の河南・李景由墓出土銀器（9-Ra8）。把手はほぼ水平で、把頭を二又につくる（以下、III類）。ほぼ同巧の金器（9-T14）が8世紀中頃の西安・何家村から出土。三脚がつく（以下、IV類）。鍋と考えている。食べ物をいたたいた魁を、直接火で温めることもしたと理解する。IV類の瓷器は、733年の西安・韋羨美墓例（9-Qb6）などにあるが、8世紀後半からはすたれる。

**盤・托・畚** 大盤は、V類A（円案）の出土例が見当たらなくなる。671年頃の福建・泉州出土瓷器（文献118）、7世紀末～8世紀初頭の河南・鞏義出土三彩（9-Ma9）は、VI類だが、高台がつき、盤もやや深目となる（以下、VI類C）。上に小盤と杯、あるいは7個の杯をのせている。706年の陝西・懿德太子墓壁画（第11図11）では、女人が大きな盤に果物か菓子らしきものを盛っており、大盤が食器であったことも示す。以後の例はない。

大盤の新器形は、三脚を伴うもので、脚下端が勾状に反り上がるのが特徴。744年の遼寧・韓貞墓出土銅器（文献82）が初現のようである。口縁が外折し、やや深目なのが特徴（以下、三脚円盤）。同墓ではほぼ同巧の中盤も出土。金属器以外でみると、728年の河南・鞏義出土三彩（文献275）が古い。この上には高台付の白瓷杯IV類Aらしきものを9個のせており、器台としても使用されたことがわかる。報告では飲茶器とみている。天宝年間（742～755年）の西安・韓森寨（慶徳宮）出土鍍金銀器（文献16・294・501）や西安・八府庄（大明宮東苑付近）出土鍍金銀器（9-Ub8）は、浅い花形で、口縁が外折して水平にのびるのが特徴（以下、三脚花盤）。このうち韓森寨例は八花形で、花弁端が尖る稜花形（以下、三脚花盤III類A）。内底

に鳳凰に似た鸞鳥を飾る。河北・寬城出土鍍金銀器（9-Vb7）もほぼ同巧だが、六稜花形で、内底に日本の正倉院例と似た大角鹿を飾る。年代も前二者と近いと推測する。八府庄例は、六花形で、花弁端が円形（以下、三脚花盤Ⅱ類B）。以後は三脚を伴わない花盤が主となる。なお、630年の陝西・李寿墓壁画（第11図4）や706年の陝西・懿德太子墓壁画（第11図9）には、女人が比較的大きな花盤らしきものを両手に奉げ持っている。

中盤はV類Aが初唐頃の広東・英德出土釉陶（9-Aa3）に残る。666年の寧夏・史鉄棒出土鉛器（文献29）や669・670年の寧夏・河耽夫婦墓出土鉛器（9-Ga2）は、明器だが、V類のおそらく中盤と推測される。山西・祖仁墓出土三彩（文献60）は、横長で、両端を花形につくる特殊品（以下、花形長盤Ⅰ類）。初唐とするが、伴出した瓶から、7世紀末～8世紀初と推測する。三脚円盤は、上述した744年の遼寧・韓貞墓出土銅器（文献82）がある。745年の西安・宋氏墓（文献54）では三脚円盤と三脚花盤の鉛製明器を伴出。741年の河南・慶山寺塔地宮出土三彩（9-Sa10）もほぼ同巧の三脚円盤。三脚盤は以後の例がなさそうである。

小盤は、古式のVI類Aが、661年の広東・許夫人墓出土瓷器（9-Ec3）や741年の広東・張九齡墓出土陶器（9-Rc2）に残る。高台付のVI類Bの系統をひくのは、遼寧・敖漢旗出土鍍金銀器（9-Ha3）だが、高台はやや高く八字状になる（以下、VI類C）。内底に虎らしき動物を飾る。ササン朝ペルシャの影響をうけたもので、年代は618～683年に比定している（文献16など）。652・654年の四川・冉仁才墓出土瓷器（9-Ea4）はそのVI類Cを模したものであろう。新器形は、体部が丸味をもって立ち上がる738年年の河南・王仁波墓出土瓷器（9-Rb1）である（以下、VII類A）。盛唐早期とみる河南・鄭州出土瓷器（9-Oc2）、7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土瓷器（9-Lb4）や708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（9-Nb4）や750年の河南・鄭秀夫婦墓出土銅器（9-Vc5）は口縁のやや外反する（以下、VII類B）。741年の河南・慶山寺地宮出土三彩（9-Sa3・Sa4）は体部が開き気味（以下、VII類C）。金属製品の新器形は、脚がない平底の花形の盤（以下、花盤）。664年の陝西・鄭仁泰墓出土銅器（文献312）や寧夏・史鉄棒出土銅製明器（9-Fb5）が初出のようである。ともに口縁は直立するのが特徴で、前者は六稜花形（以下、花盤Ⅰ類A）、後者は六花形（以下、花盤Ⅰ類B）。後者と同類は708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（9-Nb5）。I類の鉛製明器は742年頃の西安出土例（文献272）にもある。8世紀中頃に埋納された西安・何家村では八花形銀器（9-T5・T6）や桃形銀器などがあり、内底に鳳凰や熊などを飾る。体部が外傾したのち、口縁で短く外折するのが特徴（以下、花盤Ⅲ類）。三脚円盤は7世紀末～8世紀初の西安出土交胎釉陶（文献2）がある。

托は好例がない。7世紀後半～8世紀前半の壁画（第11図8、文献56・385）をみると、杯IV類らしきものを下盤にのせて運ぶ様子がうかがえる。中盤V類Aや小盤VI類Aなどがそれにあたるのかもしれない。

畚らしきものは、630年の陝西・李寿墓壁画や668年の西安・李爽墓壁画（第11図4）にある。7・8世紀とみる杯IV類Dをいれた滑石製品（文献48）があるが、類例は乏しい。

洗・銚 洗と呼んでいるものは、いずれも浅洗で、多くは銅器。北魏5世紀のII類の系譜をひくが、口縁は外反程度のものもある。古いのは673年の遼寧・左才夫婦墓出土銅器（9-Gc7）、

7世紀末～8世紀初の河南・鞏県出土三彩（9-L b10）で、口縁の外反は強くない（以下、IV類A）。主流は、694年の河南・李守一墓出土銅器（9-J c7）、718年の河南・李珣墓出土銅器（9-P b6）、733年の西安・韋美美墓出土銅器（9-Q b7）や738年の河南・李景由墓出土銅器（9-P a4・R a10）、744年の遼寧・韓貞墓出土銅器（9-S c16）や盛唐とする河南・偃師出土銅器（文献181）などで、口縁がやや上向きに外折する（以下、IV類B）。731年の河南・鄭夫人墓出土銅器（9-Q a8）、8世紀中頃の西安・何家村出土金器（文献16・310）は、体部が外傾したのち外反する（以下、IV類D）。708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（9-N b8）はIV類Bに大きな高台をつけたもの（以下、IV類C）。これらのうちIV類Dは以後もつづく。なお、開元～天宝年間（713～755）とみる敦煌・莫高窟第130窟の壁画（第12図2・3）に、反口瓶V類をのせたIV類らしきものがあり、IV類が瓶とセットで、洗として用いられたことを推測させる。同じ頃の莫高窟壁画の剃髪図（文献14）では瓶IV類かV類と、形状は異なるが高台付洗らしきものが傍らに置かれている。ただし、出土例では、瓶と洗とが伴出した確実な例がなく、礼器としての意識は薄れたのではないかと考える。

**鋗** 鋗は陶器か瓷器。浅鋗はI類の系統が619年の遼寧・朝陽出土陶器（文献432）、深鋗I類の系統が675年の恭陵哀皇后墓出土瓷器（9-I a7）、684年の湖北・李徽墓出土陶器（文献365）などにある。以後はほとんど副葬しなくなるよう、実態が明らかではない。

**匜** 匝は後漢以降に途絶えていた。唐に復活するが、漢代のような礼器ではなく、酒や水を一時的に取って注ぐ、いわゆる日本の片口の機能を果したと推測する。初・盛唐では8世紀中頃の西安・何家村出土鍍金銀器（9-T 15）が唯一のようである。碗V類Cに注口をつけたもの（以下、碗形匝）。中唐にもつづく。

**盒・高足香盒・豆** 盒は銀器（一部は鍍金）が多く、バラエティに富む。円筒形のIII類Aは741年の河南・慶山寺塔地宮出土例（9-S a8）や8世紀中頃の西安・何家村出土例（9-T 13）に残る。後者の一部には薬用の琥珀・珊瑚・金屑などを入れていた。前者では香爐と推定する爐が出土しており、盒は香盒であった可能性がある。III類Aに似るが、上下面が盛り上がるIII類Bは718年の西安出土例（文献31）から731年の河南・鄭夫人墓出土例（9-Q a4）や8世紀中頃の西安・何家村例（文献16）、貝形のV類はIII類と共に伴する例が多く、718年の西安出土例（文献31）から738年の河南・李景由墓例（文献132）、花形のVI類Aは同じく李景由墓例（文献132）で、それぞれ中唐にもつづく。

高足香盒は765年の洛陽・僧神会墓出土銅器（9-W c5）と同巧の江西・瑞昌唐墓出土鍍金銅器（文献395）。撮みが相輪状になる、日本のいわゆる塔鏡（以下、高足香盒III類）。ともに類似した柄香爐（10-W c3）が出土しており、これとセットになる。710～712年の四川・広元千仏崖彫像（第12図1）では、官人が柄香爐と高足香盒をもつ。柄香爐の出土例は、唐では初唐の河南・長沙墓出土銅器（文献296）が古い例。高足香盒は、以後の確実な例はない。

豆は口径が15cm前後的小形豆か明器と、口径20cmを越える大形豆とがある。後者は675年の河南・哀皇后墓出土瓷器（9-I a6）で口縁が外反（以下、III類）。前者は体部がほぼ直に立ち上がるI類が664年の陝西・鄭仁泰墓出土鍍金銅器（文献312）にある。I・II類の鍍金銅製明器が666年の寧夏・史鉄棒墓（9-F b9）や669・670年の訶耽夫婦墓（9-G a6）、I類の鉛製明器が708年の河南・李文寂夫婦墓（9-N b7）から出土。豆は以後の出土を知らない。

## b 貯蔵具・注器（付図10）

**鷄冠壺・瓶** 扁壺は中唐の例があるが、北辺部を除くとほとんどすたれてしまう。8世紀中頃の西安・何家村出土銀器（10-T1）は、皮囊（水袋）を起源とした、一般に鷄冠壺と呼ばれているもの。盛唐の西安出土瓷器（文献170）もあるが、これも北辺部が主で、遼代（916～1125）に盛行する。

瓶は反口瓶が主流である。出土金属器の例は少ない。その一つは741年の河南・慶山寺塔地宮出土鍍銀器（10-Sa1）。下肥れの反口瓶V類（いわゆる王子形水瓶）Bの系譜をひくが、下肥れの度合いが強く、脚もやや高く八字状になるのが特徴である（以下、V類C）。瓷器でみると、初唐の河北・琉璃河出土三彩（10-Dd1）や山西・祖仁墓出土陶器（文献60）、675年の恭陵哀皇后墓出土瓷器（文献273）は古式のV類A。前二者も初唐でも7世紀末近くで、祖仁墓は次述するように8世紀初にかかる可能性がある。肩が張った短胴のIV類（いわゆる蕉形水瓶）はいずれも三彩や瓷器など。684年の湖北・李徽墓出土三彩（10-Ja1）は、隋代のIV類とほぼ同巧。643年の遼寧・朝陽出土瓷器（10-Dai）や630年の陝西・李寿墓壁画（第11図3）で女人が捧げ持つのはIV類に近い。7世紀末～8世紀初の陝西・鞏県出土三彩（10-Kc1）は球胴に近く、脚もさらに高い（以下、VI類A）。上述した祖仁墓の三彩（文献60）や江蘇・揚州出土三彩（文献318）は頸・脚がより長くなる（以下、VI類B）。741年の河南・慶山寺塔地宮出土彩絵陶（10-Sa2）はVI類Aの系譜をひくのであろうが、下肥れ気味である（以下、VI類C）。

直口瓶の系統は718年の西安出土釉陶（文献328）がある。頸の両側に円筒をつけたもので、五代の絵画資料（文献14）からみて投壺である。741年の河南・慶山寺塔地宮出土ガラス器（10-Sa1）は特殊で、舎利用か（以下、II類）。

淨瓶は新種で、肩にも口を設けたもの。古いのは738年の河南・王仁波墓出土釉陶（文献274）で、反口瓶V類Aに口を付けたもの（以下、I類）。脚はやや高めで、八字状。陶器のため蓋を共造している。765年の洛陽・僧神会墓出土銅器（10-Wc1）は銅下半が直線的となり、脚も低い（以下、II類）。蓋は別造りで、撮みは円筒形。日本・韓国では撮みが多面体の古式例があるが、中国では明かではない。

**壺・細頸壺** 細頸壺はいわゆる玉壺春式のIV類Bが657年の陝西・張士貴夫婦墓出土瓷器（文献96）や7世紀末頃の河北・琉璃河出土釉陶（10-Dc2）などにつづく。新器形は球胴で、頸の長い反口のもの（以下、V類）。671年頃の福建・泉州出土瓷器（10-Gb1）、708年の西安出土陶器（10-Oa1）など。

球胴壺は、756年の河南・竇承家墓出土陶器（文献9）のように反口・長頸のもの（以下、IV類）があるが、稀な例。長胴壺は瓷器や陶器が多いが、金属器はない。代表例をあげる。古くからあまり変化しないII類Aが620年の洛陽・裴氏墓出土瓷器（文献97）、7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土瓷器（文献235）など。後者には内被せの笠形蓋が伴う。7世紀末～8世紀初の西安出土彩絵陶器（10-Mb1）は、II類だが、相輪状の撮みをもった蓋と鼓形器台を伴う（以下、II類B）。塔式罐と一般に呼ばれるもので、以後盛行する。738年の河南・李景由出土陶器（10-Ra1）、750年の河南・鄭琇夫婦墓出土陶器（10-Vc1）などである。盤口のIII類

は、胴が特に長いⅢ類Bが625年の浙江・衢州出土瓷器（10-B b1）や694年の江蘇・伍松超墓出土陶器（10-K a2）、頸が長いⅢ類Cが638年の湖北・楊氏墓出土瓷器（10-C a1）、641年の廣西・興安出土瓷器（文献529）に残る。Ⅲ類は中国南半部での地域色かもしれない。

**唾壺** 金属器は708年の陝西・韋洵墓出土銀器（文献259）。同巧品は655年の寧夏・史道洛墓出土瓷器（10-E b3）、7世紀末～8世紀初の河南・鞏縣出土瓷器（10-L b3）や三彩（10-M a3）で、隋代より盤口上端の開きがやや大きくなる（以下、Ⅳ類）。742年の西安出土瓷器（10-S b1）は口縁は開くが、頸の細い変種（以下、Ⅴ類）。

**罐・提梁罐・瓮・壠** 短胴罐で金属器は、孟に似る短頸のⅣ類がある。早期の湖南・長沙出土銅器（10-C b3）で、扁平で丸底なのが特徴（以下、Ⅳ類E）。極めて稀な例で、以後には続かない。球胴のⅡ類系統が671年頃の福建・泉州出土瓷器（文献118）や738年の河南・王仁波墓出土瓷器（文献274）などにある。四耳付きのⅤ類Aは664年の陝西・鄭仁泰墓出土釉陶（文献312）や7世紀末～8世紀初の江蘇・徐州出土瓷器（10-L c4）が最終例。

長胴罐は、最大径が胴中位あたりにあるⅡ類が、643年の遼寧・朝陽出土陶器（文献432）や7世紀末近くの河北・琉璃河出土陶器（文献448）にある程度だが、四耳付きのⅤ類は初唐の河南・鞏義出土瓷器（10-A c3）、673年の遼寧・左才夫婦墓出土瓷器（文献478）、684年の湖北・李徽墓出土陶器（文献365）などがある。

瓮の金属器は、738年の河南・李景由墓出土銅器（10-R a3）。外被せの宝珠形撮み笠形蓋を伴う。同類は8世紀中頃の西安・沙坡村出土銀器（文献302）で、撮みの座金は花形。同じ頃の西安・何家村出土銀器（文献16・310）は同類と思われるが、小形品で薬石を入れていたようである。金属器以外だと、641年の遼寧・朝陽出土陶器（10-D a3）、684年の湖北・李徽墓出土陶器（文献365）、709年の河南・李延禎墓出土陶器（10-O b3）、756年の河南・竇承家墓出土瓷器（文献9）などがある。

提梁罐は、肩の張った銀器が8世紀中頃の西安・何家村から出土（文献16）。同巧品は732年の西安出土銅器（文献24）。何家村では球胴に近くなった銀器（10-T<sub>2</sub>・T<sub>3</sub>）も出土。うち1点は外被せの輪状撮み付き笠形蓋が伴う。ともに高台がある。731年の河南・鄭夫人墓出土銅器（10-Q a3）は平底。同巧の銅器は福建・浦常からも出土（10-P d2）。前者は鍍と呼んでおり、火にかけた可能性もある。既述した北周の鍍Ⅴ類とも類似しており、その伝統が残ったのかも知れない。630年の陝西・李壽墓壁画（第11図2）では、女人が提梁罐をさげ、もう一方の手に角杯をもっており、罐に酒の入っていた可能性も示す。他に円筒状の提梁罐が741年の河南・慶山寺塔地宮出土銅器（10-S a4）にある。

壠は金属器がない。肩の張ったⅢ類Aが667年の陝西・段伯陽墓出土瓷器（文献298）、肩の張りが弱いⅢ類Bが689年の山西・崔拏墓出土陶器（文献364）、718年の河南・李珣墓出土陶器（10-W d2）、袋状口縁のⅣ類が673年の遼寧・左才夫婦墓出土瓷器（10-G c2）にある。

**鎚壺・三脚罐** 鎚壺は673年の遼寧・左才夫婦墓出土銅製明器（10-G c3）が唯一例。前漢代Ⅰ類の復古品のような古調を示すが、北周のⅤ類に似て、注口が立ち上がりらず、ほぼ水平な点が新味（以下、Ⅵ類）。以後は途絶する。

三脚罐は、短胴罐に三脚をつけたもの。718年の西安出土鍍金銀器（文献31）が初出のようである。頸がやや長目で、球胴（以下、Ⅰ類）。総高5.3cmの超小型品。類似した小型品は8世

紀中頃の西安・何家村出土銀器（文献16・310）にあり、薬石用と推定している。ともに宝珠形撮みの笠形蓋を伴う。744年の遼寧・韓貞墓出土三彩（文献82）は、総高約18cm。球胴だが、短頸（以下、II類A）。I類は前漢の鎚尊と類似し、温めることにも用いたと推測する。II類も同様であろう。中唐にもつづく。

**有柄壺・有柄注壺・注壺・水注** 有柄壺は金属器がない。盤口の壺III類に長い環状把手1個をつけた瓷器が668年の西安・李爽墓から出土（文献291）。最終例である。新器形は双柄だが單胴（以下、双柄壺II類）で、7世紀末～8世紀初の河南・鞏義出土三彩（10-Ma2）、706年の河南・宋祐墓出土三彩（10-Nai）、738年の河南・王仁波墓出土瓷器（10-Pb2）などがある。類例は、中・晚唐にはないようだが、北宋にはある。

有柄注壺は金属器がある。口縁を片口にしたIV類の銀器が内蒙古（文献437）と遼寧・敖漢旗（10-Ha2）から出土。北周のIV類Aに比して、ともに球胴に近い点が異なる（以下、IV類D）。内蒙古例は7世紀後半と推定しており、遼寧例も近いと考える。708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（10-Nb2）もほぼ同巧。7世紀末～8世紀初と推定する河北・蔚県出土釉陶（10-Mc4）は肩が張る（以下、IV類E）。蓋は鳳凰形である。類例は706年の陝西・永泰公主墓壁画（第11図7）で女人が手にするが、器形はIV類Cに近い。741年の河南・慶山寺塔地宮出土銅器（10-Sas）は、下肥れが強い（以下、IV類F）。胴下半に飾る人面からインドあたりからの招来品とみている。

反口・長頸の長胴壺の肩に注口をつけた有柄注壺V・VI類は、確実には8世紀に入った出土例が出てくる。<sup>註9)</sup> 706年の河南・宋祐墓出土銅器（10-Na2）は注口が短いが、なで肩で、胴もやや短目（以下、V類A）。761年の河北・史忠明墓出土瓷器（10-Wb2）も注口は短いが、胴長で肩が張る（以下、VI類A）。

注壺は、長胴壺の口縁を片口にしたIV類の瓷器が、668年の西安・李爽墓（文献291）から出土している程度。

水注としたのは、短胴罐に注口をつけた三彩（文献24）。これも類例は少ない。

以上の他に特殊なものとして、二重口縁罐が684年の湖北・李徽墓出土瓷器（文献365）に残るが、以後は途絶える。

### c 煮沸具（付図10）

**鍋・提梁鍋・三脚鍋** 鍋は口縁下がくびれるII類が684年の湖北・李徽墓出土鉄器（10-Ja4）に残る。口縁が長く、胴も長手になって、日本でいう釜に近いものとなる（以下、II類D）。738年の河南・李景由墓出土銀器2点は、小型であり、碗とする。だが、西晋までの鍋I類と形が類似することから鍋とみる。1点（10-Ra4）は深目のI類Dに近いが、他の1点（文献132）は体部が外傾する浅目のもの（以下、I類E）。釜とともに類例が少なく、実態は不明。

提梁鍋は新器種。731年の河南・鄭夫人墓出土銅器（10-Qa4）は、深目の半球状で、外に梁をつけるもの（以下、I類）。8世紀中頃の西安・何家村出土銀器のは、口縁が外反する浅目の鍋である。うち1点（10-T4）は、口縁の外反が弱いもの（以下、III類）。他の1点（10-T5）は口縁が二段になるもの（以下、IV類）。ともに薬石を調合（練丹）するためのものと推定している。

三脚鍋は、三国時代まであったⅠ類の系譜をひき、口縁がわずかに外反するものが8世紀中頃の西安・沙坡村出土銀器（文献302）にあるようだが、詳細不明。主体になるのは、口縁の内側に環状ないし方形の耳をつけるものだが、三国時代まであった三脚鍋Ⅰ類と異なって、口縁は強く外反し、脚も長い（以下、Ⅲ類A）。744年の遼寧・韓府君夫婦墓出土鉄器（10-S c3）や、ほぼ同じ頃と推定する河南・鄭州出土鉄器（10-V d4）。瓷器だと初唐の湖南・長沙墓出土明器（10-D b4）がある。同墓からは口縁が二段になった瓷器（文献101）も出土（以下、Ⅳ類A）。また、それに注口をつけた瓷器（10-D b5）も出土している（以下、Ⅳ類B）。

**釜・甑** 出土例は、706年の陝西・永泰公主墓出土釉陶（文献300）ぐらいである。釜は鍔付の球胴Ⅱ類Bで、甑をはめ込む。甑は、筒状Ⅲ類の陶器が684年の湖北・李徽夫婦墓（10-J a3）から、底に大孔1個を穿ったV類の瓷器が652・654年の四川・冉仁才墓（文献223）から出土。墓への副葬例が少なく、実態はつかめない。

**鎌斗** 鎌斗は、古いⅡ類の系統をひく、630年の洛陽・裴氏墓出土鉄器（10-B c4・B c5）がある。深目で把手が龍頭でないのは鉄器のためか。注口付のVI類Aも673年の遼寧・左才夫婦墓出土銅器（10-G c4）や、8世紀中頃の西安・何家村出土銀器（文献310）にある。後者は薬を温めるものと推定。唐代に入っての新式は、Ⅱ類の系譜をひくが、把手の対面に板状の尾翼をつけたもの。尾翼には環をつけたものがある。把手と環に梁をつけ吊ったのであろうか。7世紀末頃と推定する河北・琉璃河出土鉄器（10-D d5）や7世紀末～8世紀中頃の江蘇・鎮江出土銅器（10-We4）は注口のないもの（以下、V類A）。738年の河南・李景由出土銅器（10-R a5）は注口のあるもの（以下、V類B）。後者の類例は福建・浦城出土銅器（文献131）。744年の遼寧・韓府君夫婦墓出土鉄器（10-S c2）は、口縁がほぼ直なもの（以下、VI類）。鎌斗は、以後は途絶える。

#### d 雜 器（付図10）

**熨斗** 708年の河南・李文寂夫婦墓出土鉛製明器（10-N b4）があり、把手の頭を宝珠形につくるⅢ類。墓への副葬例が少ないため、実態は明らかでない。

**爐** 三脚付の爐Ⅳ類Aは初唐の湖南・長沙出土瓷器（10-D b6）や671年頃の福建・泉州出土瓷器（10-G b6）などがあり、Ⅳ類Bは641年の廣西・興安出土瓷器（文献529）などがある。8世紀初と推定する河南・鄭州出土瓷器（10-P a7）も三脚付だが、器は盤状であり、爐の下盤になろう。

爐の新器形は、北周に登場したⅢ類Aの系譜をひき、これに蓋を加えたもの。741年の河南・慶山寺塔地宮出土鍍銀器（10-S a6）は、天井部が盛り上がった、ハート形透しの蓋を伴う（以下、Ⅲ類C）。胴部は無文で、六脚なのも特色。8世紀中頃の西安・何家村出土銀器（10-T 6）は三葉文透しの蓋と、身及び中間材の三段構成（以下、Ⅲ類D）。胴部は沈線をめぐらせ、口縁は中間材をうけるために直に立ち上げている。五脚。これは薰爐とする。

**燈** 盛行するのは隋代に出現した豆形V類。高足盤（豆）とも呼んでいるが、後述する874年頃の法門寺出土例からみて燈である。ただし、これがいわゆる金山寺形香爐の祖型になると考へる。金属器はない。689年の山西・崔拏墓出土瓷器（10-J b5）が古い例。体部は浅目で口縁が外折し、脚部は中程に太い突帯をもつが、丸底風のもの（以下、VI類B）。盛唐早期とす

る河南・鄭州出土三彩（10-Oc5）も同類。709年の河南・李嗣本墓出土三彩（10-Pa6）は、脚が八字状で、突帶もない（以下、V類C）。738年の河南・王仁波墓出土瓷器（10-Rb6）も同類。中唐にもつづく。671年頃の福建・泉州出土瓷器（10-Gb5）は豆燈III類の系譜をひくが、油皿が浅い（以下、III類E）。708年の陝西・永泰公主墓出土瓷器（文献300）も同類だが、皿の脚が特に長く、しかも多数の突帶をめぐらす（以下、III類F）。初唐の広東・曲江出土陶器（10-Ab4）は燈台の脚が特に長くなった新器形（以下、IV類）。蓋と台を別造りにした蓋燈の好例は知らない。

他に蠟燭燈IIが、706年の河南・宋祐墓出土銅器（10-Na3）にある。初唐の河南・長沙出土瓷器（10-Db7）や7世紀末～8世紀初の河南・鞏県出土三彩（10-Lb5）も同類。706年の陝西・永泰公主墓壁画（文献300）や同年の懿德太子墓壁画（第11図9・11）には、蠟燭をさした盤状のものを捧げもつ女人の姿がある。

なお、杯や碗の一部が燈として用いられていることは、既に触れた通りである。ほぼ同形だが、763年の湖南・鄭府君墓出土瓷器（10-Wb5）は、内耳1個をもち、蓋燈とみている（以下、蓋燈VI類）。

## ii 中・晚唐～五代・十国時代

### a 食膳具・水器（付図11）

**飲器** 高足杯は、VII類Aの系統が中唐とみる河南・邢窯出土瓷器（11-Ee1）に残るが、稀な例。中・晚唐では杯部が縦長の花形になる（以下、VIII・IX類）。VIII類は口縁が外反するもの、IX類は口縁がほぼ直なもので、ともに脚は太く低目である。VIII類は江蘇・丹徒出土銀器の2点（文献342）。1点は、腰に稜があるもの（以下、VIII類A）、他の1点は杯部に遼がなくやや浅目のもの（以下、VIII類B）。丹徒出土品の年代は、原報告（文献342）では盛唐晚期としたが、韓偉（文献16）は第四期（821～907年）とした。VIII類Aは稜碗や高足杯VI類Dの影響がうかがえ、古調であるが、類例が少なく断定できない。後述する他の伴出品からみて、大きくは9世紀後半としておく。

IX類は、銀器の例が多い。850年頃の陝西・背陰村出土例（文献307）や901年の江蘇・水丘墓出土例（文献16）などだが、以後の確実な例はない。

他に、901年の江蘇・水丘墓出土銀器（11-Nc5）は杯身が半球状のもの。高足杯とするが、口縁外端には蓋受けの段があり、香爐か盒の可能性が強い。晩期の江蘇・鎮江出土瓷器（11-Oa1）は豆とする。口径10.4cm、高さ10.8cmであり、高足杯かもしれない。V類としては、杯が浅目で開き気味（以下、V類D）。V類Dは北宋にも続くが、例は少ない。

角杯はなく、把手付杯も中唐とみる河南・邢窯出土瓷器（11-Ee2）にVI類Aの系統が唯一ある程度だが、曲長杯は盛行する。典型的な曲長杯II類Aは、850年頃の陝西・背陰村出土銀器で、小さな高台がつく（文献307）。I類に類似した鍍金銀器は晩期の浙江・長興出土例（文献343）。900年の浙江・錢寬墓出土瓷器（11-Nb1）は高い脚がつく（以下、II類B）。同類の銀器は877年銘の伝西安・北邙山出土例（文献500）や江蘇・鎮江唐墓出土例（文献489）などがある。824年の河南・齊國太夫人墓出土金器（11-Da2）は、四花形の楕円杯で、大きい高

台がつく（以下、花形長杯）。これには、後述するように、花形長盤Ⅱ類Aが托として用いられた可能性がある。花形長杯の出土例は多く、840・842年の河南・崔防夫婦墓出土銀器（11-G1）や瓷器（11-G2）、845年の河南・李存墓出土玉器（11-I2）、850年頃の西安出土銀器（11-Kb1）、晚唐の福建廈門出土銀器（11-Ob2）などだが、10世紀以降はすたれるようである。

**杯・碗・鉢** 杯は、高台付Ⅲ類の系譜をひく玉器（11-Da1）が824年の河南・齊国太夫人墓から出土。大差ないものは、五代923年の河北・王處直墓出土瓷器（11-Qc2）や十国962年の南京・李璟陵出土瓷器（11-Sc2）などにある。中唐の広東・英德出土釉陶（11-Ed3）や五代923年の河北・王處直墓出土瓷器（11-Qc1）は高台付杯Ⅳ類A。中・晚期の西安・青龍寺出土瓷器（11-Fa1）はⅣ類B。847年の河南・穆宗墓出土瓷器（11-Ja1）は、8世紀中頃のⅣ類Fより口縁が反る（以下、高台付杯Ⅳ類G）。五代955～960年の洛陽出土瓷器（11-Sb1）は、体部がやや内弯気味で、口縁が外折する（以下、Ⅳ類H）。856年の河北・劉府君墓出土瓷器（11-La1）は高台付杯V類C。口縁が外反する浅目の高台付杯VI類Cは、900年の浙江・錢寬墓出土瓷器（11-Nb2）や、五代909年の洛陽・高繼蟾墓出土銀器（11-Qa3）で、南北朝後半のものより浅目となる（以下、VI類B）。8世紀中頃に登場したⅦ類は、778年の河南・鄭洵夫婦墓出土瓷器（11-Aa1）につづく。丸底杯は晚唐～五代の江蘇・無錫出土銅器（11-Pe4）。浅目で、体部が外傾する（以上、V類）。

他に、花形杯が9世紀末頃と推測できる浙江・淳安窖藏銀器（文献530）にある。平底だが、Ⅱ類よりやや深目（以下、花形杯Ⅲ類A）。十国939年の浙江・康陵出土瓷器（11-Ra1）は、輪花状で、高台はやや高目（以下、花形杯Ⅲ類B）。

碗のうち、平底碗は深目のⅠ類系統が、9世紀とみる浙江・淳安窖藏銀器（文献530）にある。体部に籠目文のある特異なもの。同巧品は、877年と推測できる伝西安・北邙山出土銀器（文献500）。平底碗で、体部が外傾するのは842・843年の河南・李郁夫婦墓出土瓷器（11-Ha4）や晚期の浙江・長興出土銀器（文献343）。ともに浅目である（以下、Ⅶ類）。丸・平底碗の例はきわめて少ない。

高台付碗は、8世紀中頃に登場したⅠ類Dの系統が、824年の河南・齊国太夫人墓出土銀器（11-Da4）に残る。Ⅰ類Dに比して体部がやや開く（以下、Ⅰ類E）。内面に綾帶文を施す点は特異。814年の河南・鄭紹方墓出土瓷器（文献132）もほぼ同巧。881・882年の河南・李杼墓出土瓷器（11-Na4）や五代後期の洛陽出土瓷器（11-Sb4）は高台がやや小さくなる（以下、Ⅰ類F）。VI類Bは850年頃の陝西・背陰村出土鍍金銀器（11-Ka3）。体部に蓮弁などを飾る。外底に「宣徽酒坊字字号」の刻銘がある。飲酒用か。この系統の瓷器は多く、778年の河南・鄭洵墓例（11-Aa2）、847年の河南・穆宗墓例（11-Ja4）、晚唐の広東・和平出土瓷器（文献195）までそれ程大きくは変わらない。8世紀中頃に登場したⅦ類の典型は以後にはつづかないが、797年の河南・鄭州出土瓷器（11-Bc3）は口縁が外接し、Ⅶ類の変化と推測する（以下、Ⅶ類C）。類例は十国943～946年の南京・李昇陵出土瓷器（11-Rb5）など。瓷器では体部が直に開くⅧ類が、中唐晚期の西安・青龍寺遺跡（11-Fa3）、五代末頃の河南・鞏義（文献235）などから出土。北宋にもつづく。

高台付の稜碗はⅢ類の系統が中唐とみる河南・邢窯出土瓷器（11-Ee6）にあるが、稀な例

で、以後すたれる。高台付の花碗は、850年頃の陝西・背陰村出土鍍金銀器（文献307）がある。詳細は不明だが、口縁が反り、体部が外傾するようである。これと同類と推測されるのは、晩期の福建・廈門出土鍍金銀器（11-O b3）。高台を欠失するが、浅目のもの（以下、高台付花碗IV類A）。瓷器の例は多い。829年の河南・韋河墓出土瓷器（11-D c5）は花碗IV類A。874年の陝西・法門寺出土瓷器（文献19・21・370）は、やや深目で、底がすぼまる。この点は、9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器（11-O a4）や、五代909年の洛陽・高継蟾墓出土瓷器（11-Q a5・Q a6）が似ている（以下、高台付花碗IV類B）。北宋にもつづく。

鉢は8世紀前半に盛行した平底鉢V類が残る。840・842年の河南・崔防夫婦墓出土銅器（11-G 5）で、丈がやや高くなる（以下、V類C）。十国918年の四川・王建墓出土銀器（文献1）も同巧。以後は途絶えるようである。中唐早期の河南・鄭州出土瓷器（11-B d4）は、体部が丸味をもってほぼ直に立ち上がる深目の高台付（以下、V類A）。842・843年の河南・李郁夫婦墓出土瓷器（11-H a6）も同類だが、やや小型で、口縁がわずかに外反（以下、V類B）。以後の確実な例はない。

鉢の新器形は、上述したV類Bの系譜をひく、9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土鍍金銀器（11-M a3）。花形鉢で、体部がほぼ直に立ち上がったのち口縁で外反する（以下、花形鉢I類A）。高台も八字状で高いのが特徴。丹徒では蓮の葉を伏せたような銀製の蓮葉蓋（11-M 2）が出土しており、口径からみて組み合うのは花形鉢しかない。五代923年の河北・王処直墓壁画（第12図11）には、山形の蓋をした大型の花形鉢を運ぶ女人が描かれている。なお、630年の陝西・李寿墓壁画（第11図5）にも蓮葉蓋らしきものを被せた円形鉢を捧げもつ様がうかがえる。五代の浙江・東清出土瓷器（11-S d7）は花形鉢を小さく、深くしたもの（以下、花形鉢I類B）。五代932年の福建・王審知夫婦墓出土瓷器（11-Q d7）は、体部がほぼ直立する深目のもの（以下、花形鉢II類A）。十国939年の浙江・康陵出土瓷器（11-R a6）はやや浅目（以下、花形鉢II類B）。花形鉢II類Aは、北宋に盛行し、五代の絵画資料（文献14）から有柄注壺VIII類を温める器であったことがわかる。王審知夫婦墓からも、注壺の破片が出土している。

**鉄鉢形・孟** 鉄鉢形は、尖底のIV類が中唐の河北・石家庄出土黒釉陶（11-E a7）にある。874年の陝西・法門寺出土金器（文献19・21・370）は口径9.4cmの小型品だが、形はIV類に似る。ただし小さな平底（以下、V類）。五代・十国時代の例は知らない。

孟は、IV・V類の系譜をひくものが残り、胴が下肥れ（以下、VI類）も登場する。金属器はない。V類BとVI類は820年の江蘇・□府君墓出土瓷器（11-C d6・C d7）。VI類は846年の江蘇・張夫人墓出土瓷器（11-H b7）が最終のようだが、V類Bは9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器（11-Q a5）、十国939年の浙江・康陵出土瓷器（11-R a7）まで残る。孟は北宋にはすたれるようである。

**托・盤** 托は、窪んだ内底と口縁と境に突帯をめぐらす新器形（以下、IV類）が登場する。金属器はないが、840・842年の河南・崔防夫婦墓出土瓷器（11-G 3）や847年の河南・穆嶧墓出土瓷器（11-J a1）など。後者には高台付杯IV類Gがある。874年の陝西・法門寺出土ガラス器（文献19・21・370）も同類で、ガラス製の高台付杯あるいは碗が組み合う。このガラス器を飲茶器とする見解もある（文献247・373）。法門寺では茶を保管していた金属製の箱や抹茶にするための茶碾が出土しており、上述のガラス器や高台付瓷碗IV類Gが飲茶用であった可能

性はある。茶碾と思われるものは、中唐の河北・石家庄出土石器（文献120）や842・843年の河南・李郁墓出土瓷器（文献181）があり、8、9世紀には飲茶の風習がかなり広まっていたことを示す。十国939年の浙江・康陵出土瓷器（11-R a2）は高台・承け台とも高い新型式（以下、V類）。

花形托も新器形。後述する824年の河南・齊国太夫人墓出土鍍金銀器（11-D a3）は、菱花の花形長盤II類Aだが、底中央を楕円形に窪ませて擬高台としており、このくぼみが花形長杯の承けになった可能性もある。花形托の主流は、内底を深く窪ませ、口縁との境に突帯をめぐらせた高台付のもの。銀器が多い。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土例（文献342）は、高台が高い（以下、花形托I類A）。これらは高足杯Ⅲ類A・Bと組む可能性がある。850年頃の陝西・背陰村出土例（11-K a4）や860年の西安出土例（11-L c3）は、丹徒出土例と似るが、高台が低い（以下、花形托I類B）。後者には「茶庫（中略）拓子」の刻名があり、飲茶用の托であったことが知れる。伴出した杯・碗は不明だが、托の承け台は径約8cmで、杯ではなく、碗が飲茶器であったことにある。花形托I類Bの瓷器は856年の河南・劉府君墓出土例（11-L a1）がある。これには高台付杯V類Cをのせていた。五代955～960年の洛陽出土瓷器（11-S b3）は、花形托でも口縁に切り込みをいれただけの退化型式で、杯・碗受けの突帯を窪んだ内底と口縁の境でなく、底隅につくる新器形（以下、花形托II類）。これには高台付杯IV類Hが組み合う。北宋では花形托II類が展開する。

なお、五代923年の河北・王處直墓壁画（第12図11）には、花形托上に杯か碗をのせて運ぶ様が描かれている。

盤のうち、大盤は三脚花盤II類Bの系譜をひくが三脚のない796年頃の遼寧・喀喇沁旗出土銀器（11-B b5・B b8）、798～802年の西安・坑底村出土金花銀器（文献16）がある。花弁と花弁の境が明瞭でなくなる。また内底に虎や獅子などを飾るが小さく、周囲に牡丹文などを配するようになる（以下、花盤II類C）。大盤では以後の例がない。

中盤の新器形は、788年頃の西安・西北工業大学窖藏出土鍍金銀器（11-B a2）。丸底の浅い器で、外縁が外反する（以下、Ⅷ類）。極めて稀な例。850年頃の陝西・背陰村出土鍍金銀器（11-K a5）や866年頃の陝西・藍田出土鍍金銀器（文献16）は、口縁が直立する（以下、IX類）。口径は前者が23.6cm、後者は25.8cmと大きい。原報告では、これに組み合うみがないため盤としたが、韓偉（文献16）は蓋とみる。決め手がなく、両方の可能性をもたせておく。

主流は花形である。881・882年の河南・李杼夫婦墓出土鍍金銀器（11-N a7）は、大きな平底で、体部が直に立ったのち外反する新器形（以下、花盤V類）であり、伴出した唯一の銀器である唾壺の下盤の可能性が強い。824年の河南・齊国太夫人墓出土銀器（11-D a3）は、四花形の長盤（以下、花形長盤II類A）。850年頃の陝西・背陰村出土銀器（文献307）はII類Aでも平底。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器（文献342）も同類だが、高い高台がつく（以下、花形長盤II類B）。他の丹徒出土銀器（11-M 2）は、菱花形の長盤で、高目の高台がつく（以下、花形長盤III類A）。877年頃と推測される伝西安・北邙山出土銀器（文献500）は高台がさらに高く、端も外反（以下、花形長盤III類B）。900年の浙江・錢寬墓出土瓷器（11-N b3）もIII類B。したがって、丹徒出土花形長盤II類B・III類Aは850年から877年の間に<sup>註10)</sup>なる。III類は以後の例を知らない。

小盤は788年頃の西安・西北工業大学寄藏出土銀器（11-Ba1）がⅦ類C。五代早期の浙江・吳隨□墓出土銅器（文献323）もこの系統のようである。前者の内底には、対葉文で囲ったなかに双魚を飾る。874年の陝西・法門寺出土品には、口縁が外折するイスラム産の高台付ガラス盤（文献19・21・370）が出土している。十国939年の浙江・康陵出土瓷器（11-Ra3）はその系譜をひくものか（以下、Ⅷ類）。小形の花盤は銀器が多い。850年頃の陝西・背陰村出土鍍金銀器（11-Ka2）は、体部が直線的に開いたのちわずかに反るもので、高台がつく。花弁と花弁の境がはっきりしない。高台も低目（以下、花盤Ⅳ類A）。高台のつかない銀器も伴出。874年の陝西・法門寺出土銀器（文献19・21・370）も同巧だが、ここでは底に螺旋状の台をつけた特殊品も出土。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器（文献342）は花盤Ⅳ類でも高台が高い（以下、Ⅳ類B）。前蜀918年の王建墓出土金銀胎漆（文献1）も同類。

他に、874年頃の陝西・法門寺出土品（文献19・21・370）には、花盤Ⅱ類A系統のものに支脚をつけ、蓮葉を伏せた形の蓋（以下、蓮葉蓋）を伴う鍍金銀器がある。咸通九年（868）銘。通高27.9cm、盤径16.1cmで、飲茶に用いる塩をいれた塙台とみている。五代早期の浙江・吳隨□墓出土銀器（文献323）は、花盤Ⅱ類Cの系譜をひく。伝世品か。稀な例で、以後は途絶える。845年の河南・李存墓出土玉器（11-I3）のように、長方形の花盤（以下、花形方盤Ⅰ類）や十国939年の浙江・康陵出土瓷器（11-Ra4）のような正方形の花盤（以下、花形方盤Ⅱ類）もある。ともに北宋にはつづかないようである。

**洗・銅・匝** 銅は、浅銅のⅠ類の系統が900年の浙江・錢寬墓出土瓷器（文献335）や五代909年の河南・高繼蟾墓出土瓷器（11-Qa8）に残る程度。北宋の壁画には厨房の床に銅らしきものが描かれており、この時期にも実際に用いられたことがわかるが、墓への副葬は稀で、実態は不明。

洗は、8世紀中頃に出現した浅洗Ⅳ類Dが788年頃の西安・西北工業大学寄藏出土鍍金銀器（11-Ba7）、847年の河南・穆嶸墓出土銅器（11-Ja7）や850年の陝西・何溢墓出土銅器（11-Jb6）や五代早期の浙江・吳隨□墓出土瓷器（文献323）につづく。他の西北工業大学寄藏出土鍍金銀器（11-Ba6）も類似するが、平底（以下、Ⅳ類E）。866年頃の陝西・藍田出土鍍金銀器（11-Mb6）も平底だが、四花形。体部が外傾したのち反る（以下、花形洗Ⅰ類）。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器（11-Ma7）も平底の花形洗。六花形で、体部が立ち気味（以下、花形洗Ⅱ類）。これらは北宋にはつづかないようである。

なお、784年頃の陝西・法門寺出土鍍金銀器（文献19・21・370）は、口縁が外反する四花形の大形品である。径約46cm、高さ14.5cm。高台と両環耳がつく。盆と呼んでいるが、洗かもしれない。後考をまつ。

匝は、8世紀中頃に登場した碗形匝が845年の河南・李存墓出土銅器（11-I5）、858年の河南・李歸厚墓出土銅器（11-Lb4）にあり、北宋にもつづく。901年の江蘇・水丘墓出土銀器（11-Nc6）は碗形匝でも花形。

**盒・豆** 豆の良好例はない。盒は初・盛唐と同様に鍍金銀器が多く、バラエティに富む。円筒形のⅢ類Aは十国939年の浙江・康陵出土瓷器（11-Ra8）に残る。Ⅲ類Bの系統も少なく、9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土鍍金銀器（文献342）や十国933年の江蘇・新海連出土瓷器（文献286）は高台付となる（以下、Ⅲ類C）。以下では銀器（ほとんどは鍍金）のみを取り

上げる。貝形のV類は778年の河南・鄭洵夫婦墓出土例（文献181）が最終例のようである。新器形は814年の河南・鄭紹方墓出土例（文献132）や858年の河南・李帰厚墓出土例（文献9）のように隅丸方形のもの（以下、VII類A）、847年の河南・穆悰墓出土例（文献9）のように橢円形のもの（以下、VII類B）。ともに以後にはつづかない。8世紀中頃に登場した花形のIV類は、866年頃の陝西・藍田出土例（文献16）があり、五代早期の浙江・吳隨口墓出土例（文献323）をへて、北宋の典型的な菊花形の盒につづく。

この時期の新しい特色は、花形などの盒に高台がつく点である。花形の系統（以下、VI類B）は、中唐の西安出土例（11-Ec8）、842・843年の河南・李郁夫婦墓出土例（11-Ha8）などで、北宋にもつづく。四菱花形（以下、VIII類）や蝶形（以下、IX類）は上述の丹徒出土例（11-Ma4・Ma5）が初出か。

### b 貯蔵具・注器（付図12）

**扁壺・鶴冠壺・瓶** 扁壺は824年の河南・齊國太夫人墓出土銅器（文献492）がある。破碎しているため不明な点があるが、隋代にもみられたVI類の系統のようである。796年頃の内蒙古・喀喇漢旗出土銅器（12-Bb1）は双魚形の特異なもの（以下、VII類）。北方の遼では鶴冠壺もつづくが、中華にはみられない。

瓶は、有柄注壺が主流を占めるためか、出土例が少なく、金属製品もごく僅かである。反口瓶の系統は、下肥れのV類Cが中唐とする西安出土陶器（文献24）にあるが、頸部がやや太い。球胴のVI類の系統は877年頃と推測できる伝西安・北邙山出土金器（文献500）にある。脚は高いが、太いのが特徴（以下、VI類D）。肩に草花を飾るのは時代的特徴である。874年の陝西・法門寺出土鍍金銀函の刻画（第12図8）には、女人が台付きの下盤にのせた肩の張ったIV類系統の瓶を捧げもっている。この瓶には花を挿している。中唐あるいは晚唐とみる敦煌・莫高窟の藏経洞壁画（第12図6）では、座した僧の背後の樹に、肩の張った瓶IV類らしきものを袋状のものに入れて吊げている。頭陀袋も吊げたおり、僧の持物で、瓶は水筒として用いられたことが知れる。

直口瓶の系統では、口縁下に有孔双耳をもつ投壺が五代の絵画資料（文献14）に残る。直口瓶は新器形が登場する。頸はとくに細長く、やや肩の張った体部を八稜形につくるのが特徴（以下、直口瓶III類）。871年の西安出土釉陶（文献298）や874年の陝西・法門寺出土秘色瓷器（文献19・21・370）。他の類例は知らない。五代923年の河北・王處直墓壁画（文献423）には、女人が肩の張った直口瓶を手にするが、胴の面取りはない。なお、盤口瓶II類Aは、846・879年の陝西・白敬宗夫婦墓出土陶器（12-Mc1）に残る。唐末～五代の内蒙古出土瓷器（12-Pd1）は、肩の張りが強い（以下、II類B）。この系統は北宋にも残る。

淨瓶は、中唐の河北・石家庄出土銅器（文献120）がある。765年の僧・神会墓出土II類とほぼ同巧。この系統は北宋にもつづく。晚唐頃の敦煌・莫高窟の藏経洞出土紙画高僧図（第12図7）には、座禅する僧の傍らに淨瓶らしきものを置いている。

**壺・細頸壺** 細頸壺は、短頸のII類Cの系譜をひくものが、858年の河南・李帰厚墓出土瓷器（12-Lb4）にある。小型品。体部を花形につくるのが特徴（以下、花形小壺）。いわゆる玉壺春式のIV類は、陝西・法門寺出土ガラス器（文献19・21・370）があるが、これは5世紀に遡

るらしいことは既に触れた。IV類の出土例を知らないが、北宋では新たな展開を見る。他に、肩が張って口縁が外反する大型品（以下、VI類）が中唐前期の江蘇・趙氏墓出土釉陶（12-C a1）、9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土陶器（12-O a2）十国941・952年の浙江・吳越王墓出土瓷器（12-S a1）にある。

短・長胴壺類は出土例が少なく、金属器も稀。877年頃と推定する伝西安・北邙山出土鍍金銀器（文献500）は、球胴で、高い高台をつける。頸は太いが長目で、口縁を波状にするのが特異（以下、球胴壺VI類）。他に類例を知らない。塔形の長胴壺II類Bは多く、778年の河南・鄭洵夫婦墓出土陶器（12-A a2）、836・854年の山西・高徽夫婦墓出土陶器（12-K c1）、晚唐の陝西・隴県出土陶器（12-O c1）などがあるが、五代以降は途絶える。

**唾壺** 唾壺は、盤口ではなく、口縁が直線的に開くようになる（以下、V類）。814年の河南・鄭紹方墓出土瓷器（12-C c2）、845年の河南・李存墓出土瓷器（12-I 1）、858年の河南・李婦厚墓出土瓷器（12-L b1）、9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器（12-O a3）、9世紀末頃の西安・新筑出土鍍金銀器（12-M d3）は、いずれも体部が下肥れと古調（以下、V類A）。901年の江蘇・水丘墓出土銀器（文献16）、五代932年の福建・王審知夫婦墓出土瓷器（12-Q d1）、十国939年の浙江・康陵出土瓷器（12-R a1）はいずれも球胴となる（以下、V類B）。北宋の出土例は知らない。

**罐・瓮・壠** 罐は、金属器がなく、陶器や瓷器などである。短胴罐は、出土例が少なく、肩が張るI類の系統が中・晩期の山西・大同出土三彩（文献457）や晩期の廣東・和平出土瓷器（12-P a4）、球胴II類の系統が十国909年の河南・高繼蟾墓出土瓷器（12-Q a4・Q a5）にある程度。むしろ後述する三脚罐が主となる。長胴罐は、最大径が胴中位あたりのII類が778年の河南・鄭洵夫婦墓出土瓷器（12-A a4）、9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器（12-O a6）にある。十国939年の浙江・康陵出土瓷器（12-R a3）は体部を花形につくり、北宋への過渡となる。

瓮は自名の金属器がある。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器（文献342）。肩が張る長胴で、外被せの宝珠形撮み付き蓋が伴う。金属器以外の例は多く、代表例をあげると、778年の河南・鄭洵墓出土陶器（12-A a3）、845年の河南・李存墓出土瓷器（12-I 4）、晚唐の福建・廈門出土瓷器（12-O b8）、五代～北宋初の河南・鞏義出土陶器（12-T 4）などがある。

壠は、肩張りが弱いIII類Bが784年の洛陽墓出土陶器（12-A c1）にあるが、頸は細くなる（以下、III類C）。袋状口縁のIV類は881・882年の河南・李杼夫婦墓出土瓷器（12-N a2）に残る。ともに北宋にもつづく。

**注壺・有柄注壺・水注** 注壺は、口縁を片口にしたIV類が、中・晩唐の山西・大同出土陶器（12-E f1）に残る。中国北半部の地域色か。836・854年の山西・高徽夫婦墓出土陶器（12-K c2）は反口瓶V類を片口にしたもの（以下、V類）。ともに北宋にはつづかない。盤口の壺に注口をつけたものは874年頃の陝西・法門寺出土鍍金銀器（文献19・21・370）。球胴で、有節の高い脚をもち、口縁近くまでの曲がった注口をもつ（以下、VII類）。胴部に三鈷金剛杵を飾っており閼伽瓶と呼んでいる。日本でいう淨明寺形水瓶の源流になる。

有柄注壺は、出土例が多く、バラエティに富む。口縁を片口にしたIV類は、晩唐～五代の河北・臨城出土瓷器（11-P b3）で稀な例。胴は下肥れのIV類F。784年の洛陽墓出土銅鏡（第

12図5）には球胴のIV類Dらしきものが表されている。

なで肩で短胴気味の有柄注壺V類は、9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器（12-Oa4）にあるが、球胴になる（以下、V類B）。十国941・952年の浙江・文穆王墓出土瓷器（12-Sa2）は、球胴で、注口が長い（以下、V類C）。例は少ない。

長胴で肩の張った長胴壺に注口をつけたVI類は、中唐前期の陝西・青龍寺遺跡出土釉陶（12-Cb3）、840・842年の河南・崔防夫婦墓出土瓷器（12-G3）、856年の河南・劉府君墓出土瓷器（12-La2）などがVI類A。元和三年（808）銘のあるVI類Aの瓷器（文献311）には、「茶社瓶」の墨書もあり、この手の有柄注壺が茶用であったことが知れる。韓偉編年第四期（821～907年）の陝西・咸陽出土金器（12-Le3）、は頸が太く直立気味（以下、VI類B）。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器（文献342）はVI類Bと、注口が口縁近くまで長い、しかも前方に曲がったVI類C（12-Ma5）がある。後者とほぼ同巧なのは、877年頃の伝西安・北邙山出土鍍金銀器（文献500）、901年の江蘇・水丘墓出土銀器（文献16）で、VI類Aの咸陽例の蓋と似るが、天井部を半球状に大きく盛り上げた蓋が伴う。咸通十三年（872）銘の西安出土銅器（文献16）も同類で、これには「宣徽酒坊」の刻名があり、酒器の可能性を示す。VI類Bの系統は、晚唐の湖南・長沙窯出土瓷器（12-Pc2）や五代909年の河南・高繼蟾出土鉛器（12-Qa2）に残る。VI類Cは北宋に続く。826年の江蘇・殷府君墓出土瓷器（12-Db1）や847年の河南・穆宗墓出土瓷器（12-Ja2）は、胴が下肥れて、やや短胴（以下、VII類A）。殷府君墓出土の他の瓷器（12-Db2）や9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器（12-Oa5）は、下肥れながら長胴（以下、VII類B）。前者は胴部を花形につくる。

五代に入ると新しい有柄注壺になる。五代後期の洛陽出土瓷器（12-Sb3）や、十国939年の浙江・康陵出土瓷器（12-Ra2）で、扁球胴で、長く曲がった注口を付ける（以下、VIII類A）。五代909年の陝西・高繼蟾墓出土瓷器（12-Qa3）は、注口が短いが、口縁近くに水平につけたもの（以下、VIII類B）。VIII類は北宋に盛行する。また、VIII類Aは、既述したように北宋の壁画（文献14）をみると花形鉢II類内に置いており、VIII類のなかの液体を保温したと推測できる。VIII類を置いた机上には、杯あるいは碗と托の2組以外には菓子を盛った盤だけで、酒でなく飲茶とみるのが妥当と考える。

水注は、短胴壺に注口をつけたものが中唐頃の西安出土三彩（文献257）にある。

**三脚罐・三脚壺** 三脚罐は、中唐とする河北・邢窯出土瓷器（12-Ee4）がII類A。814年の河南・鄭紹方墓出土瓷器（12-Cc5）や、中唐の江蘇・揚州出土三彩（12-Eb5）は肩がやや張り、丈も低目（以下、II類B）。総高9.5cm。850年頃の陝西・背陰村出土鍍金銀器（12-Ka3）は総高5.3cmの小型品だが、肩が張り、しかも長胴化する（以下、III類）。836・854年の山西・高徵夫婦墓出土瓷器（12-Kc4）は、胴部の脚と脚の間を縦方向に壅ませた花形（以下、IV類）。総高8cm。これをうけたのが901年の江蘇・水丘墓出土鍍金銀器（12-Nc10）で、胴部には脚から上方に鰐状の突起をつける（以下、V類）。総高14.4cm。9世紀中～10世紀初の江蘇・鎮江出土瓷器（12-Oa9）もV類。総高4.5cm。五代以降はすたれるようである。小型の高徵夫婦例は粉盒とみている。

三脚壺は9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器（12-Ma6）。頸が長い点は前漢の鎇尊に似るが、小型品である。

## c 煮沸具（付図12）

**鍋・三脚鍋・提梁鍋・有柄鍋** 鍋は、口縁が外反する浅い半球状のⅠ類Eが、9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器（文献342）にある程度。

三脚鍋は、内耳をもつⅢ類Aが多く、797年の河南・劉府君夫婦墓出土鉄器（12-B c3）、845年の河南・李存墓出土鉄器（12-J a6）、晚期の広東・和平出土鉄器（12-P a5・P a6）、868年の河北・張氏墓出土陶器（12-L d6）などがある。840・842年の河南・崔防夫婦墓出土鉄器（12-G7）は同類ながらも環耳がない（以下、Ⅲ類B）。Ⅲ類Aの系統は北宋にもつづく。

提梁鍋は824年の河南・齊国太夫人墓出土銀器（12-D a4・D a5）、ともに8世紀中頃のⅠ類やⅢ類と大差ない。9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器（文献342）もほぼ同巧のⅢ類。十国918年の四川・王建墓出土銅器（12-Q b6）は浅い（以下、Ⅳ類）。

有柄鍋は、盛唐まで存続した鎌斗の三脚を省略したもの。長い把手と、これと直角位置に注口をつける。824年の河南・齊国太夫人墓出土銀器（12-D a3）や840・842年の河南李存墓出土鉄器（12-G5）。北宋にもつづく。

**釜** 漢代からあまり変化しない鉄釜系統の長胴釜Ⅲ類が784年の河南・洛陽墓出土陶器（12-A c5）にある程度。五代～北宋も、釜・甑などは墓に副葬しないようで、実態はつかめない。

## d 雜 器（付図12）

**熨斗** 778年の河南・鄭洵墓出土小型銅器（12-A a6）や784年の河南・洛陽墓出土銅器（文献283）。とともに皿部の口縁と柄の基部との間に横広の補強板をつくり出す（以下、Ⅳ類）。わずかな明器をのぞくと隋代以降の熨斗はなく、Ⅳ類が初唐あるいは隋にまで遡る可能性はある。

**爐** 中唐の河北・邢窯出土瓷器（12-E e6）はⅣ類B。778年の河南・鄭洵墓出土銅器（12-A a7）や864年の河北・張氏墓出土陶器（12-L d7）はⅣ類Aの系譜をひく。前者は高い三脚、後者は低目の五脚。ともに小さく、薰爐として使用された可能性が高い。この系統は北宋にもつづく。874年の陝西・法門寺出土鍍金銅器（文献19・21・370）のうち1点はⅢ類（薰爐）の系譜をひくが、蓋は火焰状の透かし（以下、Ⅲ類E）、他の鍍金銀器は口縁が折れる外被せ蓋を伴う（以下、Ⅲ類F）。ともに五脚で五環耳。

爐の新器形は9世紀後半と推定する江蘇・丹徒出土銀器（12-M a7）で、口縁が二段に折れ下がる爐皿と、これを受ける大きな透かしが入った台、天井が高く盛り上がった宝珠形撮みの蓋からなる（以下、Ⅴ類）。蓋には唐草文風の透かしがあり、薰爐である。同類は874年頃の陝西・法門寺地宮出土銀器（文献19・21・370）にある。風爐とするが、同巧品（文献370）は法門寺地宮中室中央にも据えており、薰爐とすべきである。十国918年の四川・王建墓出土鍍金銅器（12-Q b7）や933年の江蘇・新海連出土鉄器（文献286）もこれを継承する。

**燈** 豆燈はⅤ類Cが778年の河南・鄭洵墓出土瓷器（12-A a8）にある。晚唐や五代・十国時代の例は知らないが、この系統は北宋に入って新たな展開を見る。蓋燈Ⅵ類も中唐後期～五代の湖南・長沙窯出土瓷器（12-F c8）にあるが、以後は不明。

蠟燭燈Ⅱは、中唐後期～五代の湖南・長沙窯出土瓷器（12-F c8・P c7）や、十国918年の四川・王建墓出土釉陶（12-Q b8）にある。バラエティがある。